

アンジェイ・ワイダ監督を偲んで



ポーランド映画を代表するアンジェイ・ワイダ監督が
10月9日ワルシャワで亡くなりました。90歳でした
(1926年3月6日ポーランド・スヴァウキ生まれ)。
心からご冥福をお祈りします。
監督を偲んで、例会を企画しました。
お誘い合わせでご参加をお待ちします。



Andrzej Wajda (2008)
photo by Mariusz Kubik

日時：2016年 **12月5日** (月) **18:00**~22:00

会場：札幌エルプラザ 4F 大研修室 A, B

(北8西3、JR札幌駅北口より地下歩道12番出口：徒歩3分)



18:00~ お話：中島洋氏 (シアターキノ代表、北海道ポーランド文化協会運営委員)

18:30~ 「地下水道」(97分)

20:15~ 「灰とダイヤモンド」(104分)

予約不要、直接会場へお越しください

お問合せは、電話 090-2695-3880 (小林)、メール hokkaidopolandca@gmail.com へ



地下水道 (1956)



灰とダイヤモンド (1958)

ニ長調作品 27-2 第 71-74 小節等)で用いることもありました。a はあくまでも和音を音楽の主体とし、音楽の垂直的構造が優位となります。しかし、b になると旋律の役割が増し、和音を分散する音型がその箇所の音楽的性格に影響を与えるようになります。そして、c は和音を分散する音型が主体となり、音楽の水平的構造が優位になります。

こうしたことは、シヨパンがバロック期のリュート音楽で生まれたこの技法を自らの音楽の中で多様な方法で様式化していったことを示しています。音楽は時代や地域を越え、伝播と受容の歴史を築いていますが、その一コマ一コマに個々の音楽家ならではの美学の探究が込められていると言えましょう。(かとう いちろう)

《第 79 回例会》報告

アンジェイ・ワイダ監督を偲んで

お話: 中島洋(シアターキノ代表)、ビデオ上映: 『地下水道』(1957) 『灰とダイヤモンド』(1958)、2016年12月5日(月)18:00~22:00、札幌エルプラザ 4F 大研修室



ポーランド映画を代表するアンジェイ・ワイダ監督が10月9日ワルシャワで亡くなりました。監督を偲んで例会を企画したところ、寒い中、会員を中心に25名の方々にご参加いただきました。

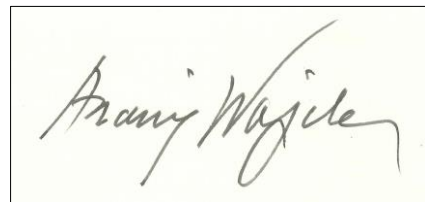
最初に中島洋さんによる作品解説が20分少々あり、ご自身の映画体験を交えて熱く語っていただきました(《追悼特集》を参照)。中でも『灰とダイヤモンド』の有名な2シーンについて「映像表現の普遍性」という観点からわかりやすく解説され、とても興味深く聞きました。中島さんにはぜひまた別の機会にゆっくりとお話を聞きたいと思います。

つづいて『地下水道』と『灰とダイヤモンド』を連続上映、会場使用時間ぎりぎりに終了しました。今回は元会員の藤平隆さん(池田町)*ご寄贈のポーランド映画VHSビデオテープ9本の中から選びました。大画面で見る画質に不安もありましたが、思ったよ

り鮮明な画像で会場の音響もまざまざでした。

会場アンケートには「熱烈な反戦映画。今日もどこかで争っているが、人間は戦う生き物かの思いです」「新会員として今日ここに来ました。愛はダイヤモンド、生きるはダイヤモンド」などの声がありました。ご参加の皆さまには感謝申し上げます。(園部真幸)

*藤平さんは12月13日に逝去されました。合掌。形見となったテープの活用法を考えたいと思います(小林)。



クラクフのManggha Centerの日本祭(1995.3.18)で思いがけずワイダ監督にサインを買った!(安藤瞬)

《アンジェイ・ワイダ監督追悼特集》

アンジェイ・ワイダ追悼

三浦 洋

ポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダが10月9日にワルシャワで逝去しました。第一次世界大戦後、ポーランド独立回復の8年後の1926年、ポーランド東北部のスヴァウキに生まれ、祖国の歴史と文化に殉じるように生きた90年と7カ月でした。

ワイダはまだ20代の若さで『世代』(1955)でデビュー。映画監督として活動した約60年間に残した長編30作・短編20作余りのうち、原点といえる「抵抗三部作」——50年代の『世代』『地下水道』『灰とダイヤモンド』——の代表作としての地位は揺らがないでしょう。一説によれば、日本で自主上映運動が広

がったのは抵抗三部作の上映がきっかけだったそうです。1949年生まれの作家、村上春樹が長編第一作の『風の歌を聴け』(1979)で主人公の「僕」に「(米国の「最後の西部劇監督」)ペキンパー以外の映画では、僕は『灰とダイヤモンド』が好きだ」と語らせているのは、この世代の関心を象徴的に表しているのかもしれない。

この作品については、本会の講演会「『灰とダイヤモンド』の成立と受容」(第74回例会、2016.2.5)で久山宏一先生(ポーランド広報文化センター)がくわしく解説されました。久山先生は2016年6月5~6日にクラクフで開催された「ワイダの90年」という学会で「日本から見たアンジェイ・ワイダ」と題して発表され巨匠との再会も果たされたので、それから4カ月後の訃報にはさぞかし驚かれたことでしょう。



私は久山先生からワイダが間もなく新作を発表すると伺っていましたが、訃報に接したとき、には信じられませんでした。遺作となった新作(原題『残像』)は政治的抑圧に抗したポーランドの前衛画家が主人公で、本年6月に日本公開が予定されています。

「抵抗三部作」に劣らず著名なのは自主管理労組「連帯」の運動を描いた『鉄の男』(1981)と、その前駆的作品の『大理石の男』(1977)でしょう。「連帯」運動から東欧革命にいたる一連の政治変動は1980年代の日本で盛んに報道され、本協会が産声を上げる背景にもなりました。

1987年、監督は「ポーランドの激動の歴史をみつめ、人間の自由と勇気、尊厳のあり方を表現し、世界に大きな影響を与えた」という理由で「京都賞」を受賞。もともと若き日に浮世絵(ヤシエンスキ・コレクション)など日本美術に傾倒した知日家で、クラクフに日本美術技術センターManggha Centerを設立する構想を1994年11月に実現させました。

ワイダ最大の功績は何かと考えるとき、旧ソ連とポーランドの歴史的問題を扱った『カティンの森』(2007)に加え、アダム・ミツキェヴィチ『パン・タデウシュ』の映画化は外せないでしょう。バチカンで『パン・タデウシュ物語』(1999)を見たヨハネ・パウロⅡ世がワイダに「ミツキェヴィチさんがどんなに喜ぶでしょうか」と語った言葉がすべてを物語っています。

かつてワイダはショパンを「感情さえ論理化しないではいかなかった音楽家」と評しましたが、この評は、深く感情に訴える主題を据えながら、感情に流されない映像を撮り続けたワイダ自身にもあてはまります。周辺の三国による分割でポーランドが消滅して15年後に生まれたショパンと、独立回復後も苦難の歴史を歩んだポーランドに生きたワイダは、自らの芸術作品を通じ祖国の激動の同時代史に殉じるようにして生きた点で、大変似ていると思います。『灰とダイヤモンド』の中で主人公のマチェク(ズビグニェフ・ツィブルスキ)がつぶやく「報われぬ祖国への愛の記念に」という印象的な台詞は、濃厚な「祖国への愛」の逆説的な表現です。ワイダとショパンはそれを体現したゆえに世界に名を馳せたといえるでしょう。(みうら ひろし)

さようなら、ワイダ監督

佐藤 晃一

2015年にポーランドへ行った際、ワルシャワを

案内してくれた女性と話をした。彼女は広島へ留学していたと言っていた。彼女に「ワイダは元気ですか」と尋ねたところ、「元気ですよ」という答が返ってきた。映画監督はそこそこ長命なので、まだまだ新作を観せて貰えると思った。

2016年2月の「ポーランド映画祭2015 in 札幌」ではワイダの『約束の土地』(1974)を観ることができたし、久山宏一氏の『灰とダイヤモンド』に関する講演は私に深い感銘を与えた。

私のワイダのベスト1は『カティンの森』。父親の体験も描かれた、第二次世界大戦告発の力作と思う。遺作の『残像』(原題)は2017年6月に日本での上映も決まった(東京・岩波ホール)。そのうち北海道でも観ることができるだろう。最近、イェジー・スコモリスキ(78歳)の新作『イレブン・ミニッツ』(2015)を観たが、大変面白かった。まだまだポーランド映画界も元気なようだ。合掌。(さとう こういち)

灰とダイヤモンド～永遠の青春映画

園部 真幸

反ソ派テロリストのマチェクが労働者党幹部のシチューカを暗殺するまでを描いた『灰とダイヤモンド』は、『世代』『地下水道』と共にワイダ監督の抵抗三部作の一つとされるが、私は青春映画の最高傑作に位置付けたい。わずか一晩の恋の物語をこれほどまでに緊張感溢れる映像として描き切った作品がほかにあるだろうか。

刹那的な恋に説得力を持たせているのは、クリスティーナとの恋がマチェクに抜き差しならない選択を迫っているためだ。背景にはポーランドの過酷な時代状況がある。映画には終戦の日に様々な思いで「戦後」を生きようとする人々が登場する。しかし、数世紀にわたって大国の利害に翻弄され、多大な犠牲を払った蜂起によっても報われることなかったポーランド民衆の心の傷は深い。

そうした人々の喪失感を象徴するように、映画には「無意味」という言葉が印象的な場面で二度出てくる。一つはベッドの中で頬を撫でようとするマチェクに対してクリスティーナが言う。もう一つは上官のアンジェイに暗殺の決断を迫られたマチェクが「一切を信じるのか」と問う場面で、アンジェイは問い自体「無意味だ」と答える。

マチェクはクリスティーナとの出会いをきっかけに「普通の生き方」を選択しようとして悩む。クリスティーナもまたマチェクが「予定」を変更することに微かな希望を見つけようとする。しかし、アンジェイの言うように問うこと自体が無意味であるのなら、もは

や彼に選択の余地はなかった。マチェックはほとんど無意味にシチューカを暗殺し、ゴミ捨て場で悶え死んでしまう。

クライマックスのシチューカ暗殺からエンディングまでの映像は実に見事で印象的だ。シチューカを抱えるマチェックの背後に戦勝を祝う花火が上がるシーン、彼が去ったあと窓から差し込む朝の日差しを受けてクリスティーナが立ちすくむシーン、そして何よりもクリスティーナの目から零れ落ちる涙……

(そのべ まさき)

永遠の勝利の暁の幻影

松山 敏

私が毎週日曜日に欠かさず通る、新川 ITC から江別西 ITC に向う道で、家並から遠のくにつれて私の想いを確実に不安に陥れる光景が飛び込む。それは「MATEC」と大きく書かれたサインのある大規模な産業廃棄物堆積場で、わずか 5 秒で過ぎ去るが、高速道路を降りるまでの数分間、ハンドルを握りながら私の目は虚空の低い雲を追っている。

持てるものは失わるべきさだめにあるを
残るはただ灰と嵐のごとく深淵に落ちゆく混迷のみなるを
永遠の勝利の暁に灰の底深く
燦然たるダイヤモンドの残らんことを……

(ポーランドの詩人ノルビッドの甲詩)

人が誰かと比べて長生きしたからといって、どのような嗣業であったと言えるのか？ また人が誰かと比べて早く死んだからといって、どのような罪があったと言えるのか？

マチェックは、赤々と燃え盛る生の鼓動の美しさを、ほんの死の直前に聴いた。純白に洗われ、まだ乾ききらぬ布のごとく、終戦で新しくされた世が訪れた瞬間に、マチェックは弾丸を浴びて倒れる。その時彼の目に飛び込んだ光景は何だったのか。

今日もまた、産廃の堆積場と「マテック」のサインを横目で見ながら教会に向けて車を走らせる者がいる。昨日までは人から愛され貴ばれてきた宝が、人に捨てられた瞬間から邪魔にされる廃棄物と化し、私たちは捨てられるべき物を着、捨てられるべき物の上



の上に住み、まさに「持てるものは失わるべきさだめにある」

世にあつて、今日も朽ちることのない何かを執拗に追い求め続けながら生きている。この不安感。やはり私も塵芥(灰)の底深くに埋め殺されたダイヤモンドに再び光があてられて輝く日を待ち望む「マチェック」の一人なのであろう。

マチェックの見据えたもの、19 世紀を生きたノルビッドが見据えたもの、そして私たちが見据えているもの、それは「永遠の勝利の暁」として多くの書に記されている秘義が成就するとき、つまり世の末に起こる復活の希望の幻に違いない。

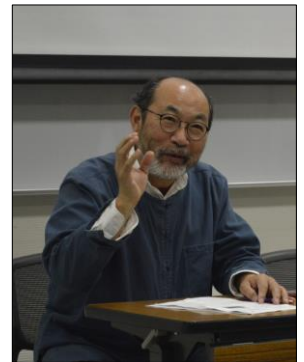
同じくノルビッドが「ショパンは野原に落とした農民の涙をダイヤモンドに変えた」と謳った意味は、世の中に起こる復活の幻をショパンという人が音楽という言葉を用いて証し、人種と国境を越えて人々全てに予見させてくれているということだろう。ワイダの映画、ショパンの音楽、ノルビッドの詩、これら全てのアートの行為は、全人類に「永遠の勝利の暁の幻」を予見させる手段である。またそれらはこの世にあつてこそ、赤々と官能的に燃え盛る血流の如くに美しくきらめき響く。

そして今、アンジェイ・ワイダ監督ご自身も文字通りのダイヤモンドとなって先発たれ、再び栄光を浴びて輝く日を静かに待っている。(まつやま さとし)

抵抗三部作は今も生きている

シアターキノ代表 中島 洋

映画を、監督を意識して見るようになった 20 代前半の頃、強い関心を持ったのは戦後まもなくのヨーロッパ映画の動き、イタリアのネオリアリズム、フランスのヌーベルヴァーグ、そしてポーランド派だった。特にワイダ監督の『地下水道』と『灰とダイヤモンド』は衝撃で、強く記憶に残っている。



ワイダ監督のインタビューを読んだり、この時代の映画を少しかじってみたりして、今思うことはポーランド派にとっての戦争体験の大きさだ。ドイツとソ連の不可侵条約で二分されたポーランドは、当時 3000 万人足らずの人口で、500 万人もの犠牲者を生んでいる。ワイダ達は最大の破壊行為である戦争の体験を後世に伝えることは義務とまで言い切っているが、同時に「私の青春を奪い取った」ことへの強い怒りがあることは重要だ。

30 歳前に撮った『世代』から『地下水道』『灰とダ

『イヤモンド』は抵抗三部作と言われるが、その抵抗には善と悪、加害者 VS 被害者という安易な図式や、ヒーローを称えるようなロマンチズムは全くない。「何よりも渾身の力をこめた自己切開の呻きがあり、体験の意味を主体的に問い詰める意識があった」(松本俊夫)。ポーランドの人々の湧き上がる抵抗の純粋なエネルギーが、政治指導の混乱と誤謬によっていかに引き裂かれたかをあぶり出したのだ。

だが、メッセージだけが優れているのではない。映画は常に「何を描くか」と「どう描くか」の両方がある。こそ素晴らしい作品が生まれると思うが、ワイダ達ポーランド派は、その映像表現もまた戦後映画に決定的な影響を与えることになる。

映像ならではの表現を、ワイダは『灰とダイヤモンド』を例にして語る。「主人公のマチェックが、共産党の要人を暗殺した時に、のけぞって倒れるのではなく、マチェックに抱かれるようにして倒れる。ここには、同じ言葉を話す同胞なのに、敵味方に別れてしまった、その責任はどこにあるのか」と。直接的な反ソの表現を避けつつも、世界の人々に伝わる普遍性を獲得したのだ。

もう一つの例は、当時の政府の検閲に関するものだ。マチェックは最後にゴミ捨て場で死ぬが、検閲官は「テロリストだから、こんな無残な死に方をして当然だから上映していい」と言った。しかし、世界の多くの観客は、マチェックを死に至らしめた背景、その体制は何であるのかを見つめたのだ。これはどちらにも解釈できるが、世界にマチェックのファンが生まれ、その精神は今も引き継がれている。

(なかじま よう)

※遺作となった『残像』は、文化の全体主義に抗して戦った画家ストウシェンスキの生涯が描かれ、抵抗三部作から培ってきたワイダ監督の原点が変わっていないことを物語っているようで、大変楽しみです。6月か7月ごろシアターキノで公開します。

ワイダと演劇

津田 晃岐

映画監督アンジェイ・ワイダは、実は斬新な演劇家でもあった。日本でもワイダ演出の『ハムレット IV』



(東京グローブ座、1990)の衝撃を覚えている人は少なくないようだ。主人公を女優が演じただけでなく、観客が見るのは楽屋で苦悩する俳優と、その奥の舞台上で演じられている『ハムレット』の一部のみという、メタ演劇的

要素に「人間と演技」といった心理学的テーマを絡めた野心作だった。その公演に興味を持った演劇関係者から芝居台本の翻訳を頼まれたのが、私とワイダ演劇との最初の出会いだった。

ポーランド語の台本は、従来の翻訳より自然なスタニスワフ・バランチャク(1946-2014)の新訳を、さらに自然な形に切り貼したものだ。そこで、バランチャクのポーランド語訳とワイダの台本、そして小田島雄志訳の『ハムレット』とをにらみ比べながら「第四の翻訳」を継ぎ合わせていく作業となった。

もう一つワイダと演劇で思い出すのは、彼が1976年に映像化したタデウシュ・カントル(1915-90)の『死の教室』だ。既に世界的名声を得ていたワイダがカントルの下に就くことにしたのは「この驚異的な芝居をフィルムに永遠に焼きつきたい」という衝動に駆られたからだ。その後の経過は「惨憺たるもの」だったと回想する¹。

一方、カントルは同時代の芸術家に言及すること自体が珍しく、ワイダの『死の教室』についても一度触れたきりで、しかも「この芝居の最良の記録」としては別人の記録映像を挙げ「でもやはり芝居の真の記録化は不可能だと思う」と言っている²。

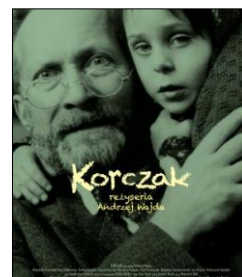
噛み合わなかった二人だが、彼らの合作である映画『死の教室』が最近デジタル化され市販された。こうして、二人の天才の共同演出が永遠に残ることになった。(つだ てるみち)

- 1 アンジェイ・ワイダ『死の教室』映画化の舞台裏 坂倉千鶴訳、『ポロニカ』2 (1991)、63-65
- 2 Tadeusz Kantor, *Trafic do światowego muzeum...*, [w:] Pisma, t. 2: "Teatr Śmierci" — Teksty z lat 1975-1984, Ossolineum i Cricoteka, Wrocław i Kraków 2004, s. 451-455.

ワイダ監督の『コルチャック先生』

塚本 智宏

私がコルチャックに関心を持ったのは1990年、ワイダ監督の『コルチャック先生』を見てからである。体制転換の1989年は、国連子どもの権利条約が採択され、世界の子ども史上に画期をなした年でもある。当時私はロシアの1917年の急進主義的自由主義者の“子どもの権利宣言”について1989年条約との関係を意識して研究を始め、この条約の提案国であるポーランドにも関心を持ち、条約の歴史的起源に第二次世界大戦での大量の子ども



犠牲者があったことを知り短い論文を書いた。

こんな人物がいたとは…観賞前、急ぎ予習し主人公について多少は知っていたが、映画の中で次々と悲劇と「試練」がコルチャックの周囲に起こり、彼と子ども達を「最後の行進」へと追い込んで行く一つのシーンが、抑えられない感涙でかすんだ。

日本はこの映画を通してコルチャックに出逢った。彼の子どもという人間に対する探究の態度や思想はその後の研究で理解できたが、まちががなくその態度や思想の延長線上に彼の「最後の行進」(子どもたちと共に死に向かっていった)があり、ワイダ監督はそれを見事に描き切った。

この作品はそもそもはポーランドにおけるユダヤ人問題を主題とし、体制転換前からすでにその生

涯を映画化する構想があり、ワイダ監督がその意志を継ぎ実現したという(新保庄三『コルチャック先生と子どもたち』1996)。脚本をA・ホランドに委ね、コルチャックの『ゲッター日記』を中心に史実の再現を試み、彼の有名な発言が随所に織り込まれている。

次の場面が強く印象に残っている——孤児院のリーダー格の少年が恋するポーランド人少女との間を引き裂かれ、他方ゲッターの中で母親と死に別れたもう一人の少年と喧嘩騒ぎになる。「ユダヤ人なんていやだ!! 死にたい」と頭をかきむしる少年にコルチャックが、子どもにも死に対する権利があると語りかけ「君は人間だ」と勇気づける——このシーンをぜひ再度注目されたい。コルチャックとワイダの記憶すべきメッセージである。
(つかもと ちひろ)

新作能「鎮魂」を観て

霜田 千代麿

「鎮魂」は東日本大震災の後、2012年3月5日「シアターX(カイ)」に於いて朗読の形で発表され、以来5年の時を経て、2016年11月、ポーランド公演に続いて、14日東京・国立能楽堂に於いて日本・ポーランド国際共同企画公演・新作能「鎮魂」—アウシュヴィッツ・フクシマの能として上演された(ヤドヴィガ[イガ]・ロドヴィッチ作、観世鍔之丞節付・作舞、笠井賢一演出)。

当日は天皇皇后両陛下も観劇された。2002年、両陛下がポーランドを訪問された折、通訳を務めたのがイガ・ロドヴィッチ氏である。また、本作の中には、2012年の歌会始に両陛下の詠まれた津波への鎮魂の和歌「津波来し時の岸边は如何なりしと見下ろす海は青く静まる」(天皇陛下)と「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」(皇后陛下)が取り入れられ、創作の重要なモチーフとなっている。

自分は、本会の朗読会「午後のポエジア」(第62回例会、2012.6.16)で、イガの許可をえて「鎮魂」を朗読した事がある。その時は第一稿で、スッキリした作品であると、深く感じ入った事を覚えている。聞くと、今回は第五稿という事であった。

ここで自分なりの了解を述べると、「能」とは「タマシズメ」である。登場者(死者)も観客(生者)も、という事である。仏教とは特に深い関係がある。それと、他の演劇とは異なり「俳句」と同じ「省略」が日本文化の精神として大変重要な意味を持つ。

作品では、アウシュヴィッツ強制収容所で拷問のすえ非業の死をとげたアチュウ青年(後シテ、ロドヴィ

ッチ氏の叔父)と、東日本大震災の津波で流されたフクシマの少年(ツレ[福島から来た日本人]の息子)が重要な二本柱となっている。



(左) 霜田英麿、遠藤郁子
イガ・ロドヴィッチ、筆者

さらに今回は加筆して、アウシュヴィッツ強制収容所博物館で20年間働き、5万人の日本人を案内してきた日本人が登場する(アイ)。彼は日本人がなぜこの博物館でガイドをするのかと自問して「記憶の場と呼ばれるアウシュヴィッツ博物館は、歴史と真実との出会いの場。フクシマとナガサキ、ヒロシマも同じ人類の負の遺産なのです。アウシュヴィッツと同じように記憶され、何故(なにゆえ)と問い、立ち止まり、そこから現代についても考えなければならぬのです」と語る。

最後に、観劇者としての素朴な感想を述べさせていただく事が許されるなら、(一)演目が長すぎる、(二)台本が未整理で、説明が多すぎる、(三)能の一番大切な時空を越えた省略がきいていない、などを挙げたい。お能とは異界からの使者たちが現れる場であり、使者たちの登場自体がメッセージ(伝言)であるから、セリフで全てを語らせる必要はない。

とは言え、ポーランドと日本の大きなテーマを新作能「鎮魂」として完成し、本格能として日本の能舞台で上演された関係者一人一人のご努力に、心からの敬意と賞賛の拍手を送ります。

(しもだ ちよまる、元グロトフスキ実験劇場研究生)